

タイ南部の船霊信仰

関 泰 子

目次

1. はじめに
 2. タイ国におけるメー・ヤー・ナーン（船霊）信仰
 3. タイ南部におけるメー・ヤー・ナーン信仰
 - 3-1. ナコン・シータンマラート県ムアン郡 P 地区の事例
 - 3-2. ラノーン県ムアン郡ガーオ地区の事例
 - 3-3. タイ南部ムスリムの船霊信仰
 4. ミャンマー東南部の船霊信仰
- 結論

1. はじめに

本稿では、タイ南部およびミャンマー東南部における仏教徒とムスリムの精霊（船霊）信仰とその実践について記述し、最後に、タイ南部における精霊信仰の変容と持続の持つ社会的意味合いについて比較考察する¹⁾。また、ミャンマー東南部の事例についても触れ、従来、一国の一地域に限定されてきた研究に対し、「文化圏」としての広がりの中での研究の必要性について提起したい。タイにおける精霊信仰研究は、近代国家形成期の仏教浸透プロセスとの関わりの中で記述されることが多い。特に、独自の信仰を有し、中央集権としばしば「対峙」してきた東北のラーオ族系文化が事例として取り上げられる傾向が強かった。しかし、「敬虔な仏教徒」として語られるモーン族や、バンコク周辺の農民社会においても精霊信仰は根強い。ただ、東北タイと同様の形式での信仰実践が行われただけで、彼らの日常生活の次元に降りて行くと、そこには現代でも精霊信仰の影響はうかがわれる。

筆者がタイ南部の精霊信仰を本稿で取り上げる理由は、タイの精霊信仰研究で取り上げられることの少ない「海」という「異界」を漁民がどのように畏怖し、海に関わる精霊を慰撫しよ

うとしてきたかについて小論を試みたいと考えたことと、仏教徒とムスリム、という「大きな伝統」の異なる住民が混じり合って住む社会で、素朴な精霊信仰がどのように共有されているのか、という現代的な問題について考察したいと思ったからである。現在の研究動向において、タイ南部のムスリム、仏教徒社会はそれぞれ別個に調査分析される。しかし、前近代においてかれらは隣接するコミュニティとして共住してきたし、双方での通婚も存在した。このような言わば「雑居」がむしろ自然な状態であった。ゆえに本論では、仏教徒とムスリムが共住するナコン・シータンマラート県、ラノーン県を事例に、彼らの船霊信仰について考察する。

通常、タイ農村の精霊信仰における「異界」は森である。森の消失、仏教の浸透による森の守護霊信仰の衰退は、精霊信仰の衰退と変容とみなされてきた。しかし、「海」という「異界」は、消失することはない。いつの時代も漁民、船乗りにとっては厳然とした「異界」として横たわる。漁民に豊穡をもたらすが、他方で常に遭難の危険と隣り合わせの「海」に頼る生活は、漁民を「迷信深く」させる。様々な精霊に彩られた陸地と切り離された漁民が頼るのは「メー・ヤー・ナーン（船霊）」である。

「船霊」とは、船に宿る精霊のことで、日本においても漁民の間で古代から信仰されている航海安全と豊漁の守護神である（楠本 1993：207）。船霊は時化や災難、嵐や大漁を「鈴虫が泣くような音」で船人に知らせると言われる（川崎 1984：336）。日本における船霊研究は、民俗学を中心に昭和初期から始まり、日本各地の漁村で、盛んにその実態調査がなされてきた。よく知られた「船霊」信仰は「御神体（男女一対の人形、サイコロ、髪の毛、五穀、古銭）」を帆柱を支えるツツに作った小さな穴に埋め込む（神野 2000：130）。地方によっては、船主の家に「船霊様」を祀ることもある（野口 1972：251）また、日本の「船霊」は一般的に女神と考えられており、女神の嫉妬を恐れるため、漁船は女性の乗船を嫌うという伝承がある。また、御神体としての髪の毛の採取、儀礼の担い手として女兒を重要視する地域も多い。しかし、男神のイメージで捉えられる伝承もあり、船霊＝女神図式が定着している初期の「船霊」研究に対して、再度、多方面から検討する必要があるであろうという意見も存在する（神野 2000：145）。

同様の船霊信仰は、タイ、ミャンマーなど東南アジア沿海部地域にも存在する。次章では、タイのメー・ヤー・ナーン信仰について考察する。

2. タイ国におけるメー・ヤー・ナーン（船霊）信仰

タイは、その国民の9割が上座部仏教を信仰するという「仏教国」であるが、現在でも多くの民間信仰（精霊信仰）が根強く存在する。「ピーー」と呼ばれる数々の「霊的な」存在の他、大地の女神であるメー・トラニー信仰はその代表例の一つであり、また、家の敷地内に建てられるチャオ・ティー（屋敷神）、サーン・プラブーム（バラモン教神の祠）などもよく知られ

るところである。津村文彦はその論文「ナン・ナークの語るもの－タイ近代国家形成期の仏教と精霊信仰－」の中で、仏教国タイにおける宗教生活の複雑さについて述べ、王室儀礼にうかがえるバラモン教要素の存在、庶民の日常における精霊信仰の存在を指摘した上で、この信仰と上座部仏教が分離不可能なほどに入り交じっていると述べている（津村 2002：25）。津村はまた、ある宗教行為に複数の「大伝統」を見出し、その要素を分析する従来の「シンクレティズム」へのアプローチでは、人々の宗教コスモスを動的に－特に近代国家形成期における「大伝統」との関わりの変化について－捉えることは出来ないと指摘する（津村 2002：25-26）。筆者も津村の指摘に同意するが、タイ南部における精霊信仰と宗教との関係はさらに複雑である。前述の通り、「森」よりもずっと制御不可能な「海」という「異界」と対峙する生活、タイ仏教の中心地の一つである「ナコン・シータンマラート」と東南アジアにおけるイスラーム普及の中心地となった「パッターニー」に挟まれ、仏教徒とムスリムに分化した民が、それぞれの「大伝統」との関わりで宗教実践を行ってきただけでなく、相互に影響を及ぼし－ある時は一つの家族の中に仏教、イスラーム、バラモン、精霊信仰が交じり合う形で－宗教コスモスを形成し、それはとどまることなく変化にさらされて来たからである。

メー・ヤー・ナンとは「船に宿る精霊」いわば「船霊（船玉）」である。船を水難事故から守り、豊漁を導くとされる。メー・ヤー・ナンを信仰する船は、その船首に色鮮やかな布（通常三色か五色）を巻き、マリーゴールド等の花を飾る（写真1参照）。特にタイ南部の漁船の色とりどりのメー・ヤー・ナンは有名で、南部の象徴として観光パンフレットに載るほどである。しかし実際は、メー・ヤー・ナン信仰は、タイ南部だけではなく、水路交通が盛んであった中部の住民や、東部の沿岸部漁民や・船乗りの間でも古くから信仰され、タイ国民にとって、非常に身近な信仰である（写真2参照）。陸路交通が主たる輸送手段である現代では、



写真1. 船の船首部分に飾られたメー・ヤー・ナン（ラノーン県ムアン郡にて）
下から青、赤、白の三色の巻布の上に、マリーゴールドの花が飾られている。



写真2. 船首にメー・ヤー・ナーン信仰の
布が巻かれたタイの軍艦
(サムットプラカン県海軍基地内にて)



写真3. 車に飾られたメー・ヤー・ナーン
(バックミラーに吊るされた花輪)

トラックやバス等の運転手を職業とする人々の間にも信仰が広がっている(写真3参照)。メーとは「母」を意味し、ヤーは「父方の祖母」、ナーンは「女性」を表すが、信仰する漁民の間で、必ずしも高齢や既婚の女性がイメージされているわけではなく、「女性の精霊」であること以外に言葉にはあまり意味がないようである。インフォーマントへの聞き取りではメー・ヤー・ナーンを若い未婚女性とイメージするケースが多かった。ただし、観音像のように、崇拝の対象となるようなパターン化した神像が存在するわけではない。

漁民、船乗りたちは、幸運、安全、豊漁などを願ってメー・ヤー・ナーンへの供儀を行った。彼らの船霊信仰は篤く、現代でも、新しく船を作る・購入するという機会にはもちろん、出航・出漁前にも必ず儀礼を行う。

ナコン・シータンマラート県でのT氏²⁾への聞き取りによると、メー・ヤー・ナーンは「船の神様」であり、船に宿り、漁民を危険から守る存在と見なされている。一度、大洋に乗り出すと、誰にも頼れない。魚群探知機もない時代には、豊漁のために頼れるのはメー・ヤー・ナーンだけだった。漁民はみなメー・ヤー・ナーンを信じていたので、悪人ですら、他人の船は絶対に盗まなかった。漁業の技術進歩著しい現代であるが、やはり漁民はメー・ヤー・ナーンを信じている。

メー・ヤー・ナーン信仰は、タイ古来の木の精霊への信仰が土台にあるという説がある。樹齢の古い巨木には、「ナーン・マイ(木の女精霊)」が宿ると考えられており、若く美しい女性の姿をしていると言う。タイの民間信仰では、日本と同様に、神聖視される樹木を他の木々から区別し、その霊性を保護するために、布が巻かれることが多い。日本の神木は殆どの場合、

しめ縄が巻かれるが、タイでは、色とりどりの布が巻かれる場合や、僧侶の袈裟と同じ黄色の布が巻かれる場合もある。

代表的な木の精霊には、「ナーン・タキアン」と「ナーン・ターニー」がある。「ナーン・ターニー」は、幹が太く早く成長するターニー種のパナナの木に宿る精霊で、緑の腰巻スカートををはき、髪が長い、若く美しい女性の姿をしている。人に厄災を与える怖い精霊ではないというが、夜になると若い男性を誘惑し誘いこむために現れる、という説もある。ナーン・ターニーに魅入られた男性は、次第に痩せて死んでしまうという。そのため、昔の人々は、ターニー種のパナナを屋敷地の中に植えることを好まなかった。

他方、タキアン木は硬木で大木になりやすく樹齢の長い木でもあるため、木の精が宿る木として信仰の対象になった。そのため、タイ人は今でもタキアン木を住居用の建築材として用いることを好まない。ナーン・タキアンは獰猛な精霊であり、怒ると人間を食い殺すこともあるからである。しかし、もし樹齢の長いタキアン木を伐採する必要がある時は、伐採者は、ナーン・タキアンの許しを得る儀式を行わなければならなかった。

中部タイ、ラーブリー県バーン・ポーン郡の寺院境内には、タキアンの古木が保存されており、ナーン・マイとして村人の信仰の対象になっている（写真4および5参照）。願い事の多くは、宝くじの当選番号透視など現世的な内容が多く、願いがかなった場合は御礼として女性



写真4. ラーブリー県バーン・ポーン郡内、寺院境内のナーン・タキアン信仰（1）

女性の精霊であるため、願いことが叶った者により、木の幹に女性用ドレスが吊るされている。



写真5. ラーブリー県バーン・ポーン郡内、別の寺院境内のタキアン木（2）

こちらは、多くの女性用ドレスが吊るされ、祭壇が設けられている。写真には写っていないが、根本に石灰が撒かれている。宝くじの当選番号を知りたい者は、タキアン木の根本に石灰を撒くと数字が浮かんでくるのだという。

のドレスをプレゼントする。このタキアン木を造船材料に用いることが多かったので、この「ナン・タキアン」と呼ばれた木の精がそのまま船に宿ってメー・ヤー・ナンになったと考える説がある (Riabrieng 1994 : 87) (写真6参照)。

しかし、前述のT氏は、メー・ヤー・ナンの語源は「ヤー・ナン」の木ではないかと言う。ヤー・ナン木の蔓は蔦状で粘り気があり、薬草にも食用にもなる。T氏によると、この地域の船霊信仰は、以前は布の代わりに、あるいは布とともにこの木の蔓を船首に巻きつけていたと年寄りから聞いたことがある。またメー・ヤー・ナンは実体化したイメージが存在しないと述べたが、T氏によると、メー・ヤー・ナンはタイの伝統的衣装を身にまとった、髪の毛の長い30代くらいの美しい未婚女性のイメージなのだそうだ。なぜ若い未婚女性かというとメー・ヤー・ナンは優しい神様だからである。他方、神が「年老いた女性」の場合、性格が荒々しくなるからだと言う (写真7参照)。



写真6. 船の材料となるタキアン木
(ナコンシータンマラート県P地区内造船所にて)



写真7. メー・ヤー・ナンの像と祠
(写真6と同じ造船所にて)

タイの伝統的衣装をまとった若い女性のイメージ。河口に向い合うように建てられている。

メー・ヤー・ナン儀礼は、通常朝行われる。供儀を行う際には、船の持ち主は舳先をきれいに清掃し、綿糸あるいは赤い布を舳先に巻き付ける。さらに香水を振りかけ、金箔を貼り、花飾りを巻く。そして舳先に祭壇をもうける。この祭壇に、豚の頭、鶏、果物、菓子、線香、爆竹、紙製の金銀といった、メー・ヤー・ナンへの供物が備えられる（Riabrieng 1994 : 88）。線香が消えるまで待ち、供物が捧げられ、全員で祈る。次に椰子の実の汁を船尾や帆柱に振りかける。最後に爆竹を鳴らし、紙製の金銀に火をつけ、海中に投げ入れて儀式は終了する（同上）。

このようなメー・ヤー・ナンへの供儀が行われるのは、船の出港、仏日、中国正月、ソクラン正月（同上）、船を新たに購入した時などである。儀礼を司るのは、中部では「タイコン（船頭）」（同上）である。また、船を作るために新たに木を切り倒すときにも許可を求めするためにメー・ヤー・ナンの祠の前で、船へのメー・ヤー・ナンの招魂儀礼が行われる。

3. タイ南部におけるメー・ヤー・ナン信仰

本章では、仏教徒とムスリムが混在するタイ南部において、この船霊信仰がどのように実践されているかについて考察する。タイにおけるムスリム人口の分布は、全 78 県中 39 県に及んでいる（橋本 1987 : 233）。タイの総人口約 6000 万人を宗教別にみると、ムスリム人口は約 280 万人、約 5% であるが、タイ全土に散らばるモスクに登録されている人口³⁾を元にした、タイ国中央イスラーム委員会の発表によれば 500 万人を超えるという（木村・松本 2005 : 83）。ただし、この人数の中には、タイ国籍を有しない外国籍の者も含まれているため、若干多めに計算されている。しかし、全世界的に多産社会であるムスリム社会の一つであるタイのムスリム社会も、人口は急増しているといえ、この「5%」の壁を打ち破るのは時間の問題とみられている。タイのムスリム人口は、バンコクや北部など全国に散らばっているが、マレーシアに近いタイ南部に集中している（地図 1 参照⁴⁾）。

タイ南部を含むマレー半島部のイスラーム化が進行したのは、15-17 世紀にかけてであり、国王がまず改宗し、一般民衆の改宗を導いていく、という流れであった。この、シュリービジャヤ文明の一角におけるイスラーム化の進行において、インドからの多神教的世界観や宗教文化を保持していた民衆への浸透過程では、スーフイズムが一定の役割を果たしたと考えられる（木村・松本 2005 : 84）。

タイ南部地域のイスラーム化は、16 世紀初めにイスラーム化したパッタニー王国に始まり、その後パッタニー王国は、同国の住民だけでなく、マレー半島北部、スラウェシ、カリマンタン、カンボジアやチャンパなどへの布教のセンターとなる（木村・松本 2005 : 85）。

現在、タイ南部のマレー系ムスリムの多くはマレー語を話し、ジャウイー文字（マレー語のアラビア文字表記）を使用し、パッタニー、ヤラー、ナラティワート県とソクラー県の一部



地図1. タイおよびミャンマー東南部 (Googlemap より引用)

ではマレー語のクランタン方言が使用され、イスラーム教育もソンクラー以外ではマレー語で行われている(木村・松本 2005: 88-89)。しかし、本論文での調査地であるナコン・シータンマラート県、ならびにラノン県では、ムスリムは少数派であり、またタイ語を母語とする人々が多く、タイ語でイスラーム教育を行っている⁵⁾。

タイでは1932年以降、どの憲法においても信仰の自由は保障され、国王も憲法上の資格においてムスリムを擁護している。法的にもイスラーム保護の勅令が制定されており、さらに南部国境4県のみにも適用される特別法(仏暦2489年パッタニー、ナラティワート、ヤラー、サトゥーンの各県にイスラーム方を適用する法律)も制定され、イスラーム法がダ・ト・ユティタム(イスラーム裁判官)によって適用されている(橋本 1987: 239-240)。

本論文で調査地に選んだナコン・シータンマラート県ならびにラノン県は、仏教徒が多数派を占める地域であり、上述する南部国境県のようにムスリムが多数派を占める地域ではない。

2つの県のムスリム集落は、仏教徒の集落と隣接し、ある時は仏教徒に囲まれるように住んでおり、相互に影響を及ぼし、婚姻関係を築き、良好な関係を長年にわたって築いてきた。

通常、「船霊」信仰は仏教徒の民間信仰として語られることが殆どである。しかし、同地域では、「メー・ヤー・ナーン」は宗教を超えた漁民の信仰の対象である。ムスリム、少数民族（しばしばクリスチャン）の関係なく、「メー・ヤー・ナーン」を知らない漁民は存在しない。次節では、調査地における仏教徒とムスリムの「メー・ヤー・ナーン」信仰の実践について述べる。

3-1. ナコン・シータンマラート県ムアン郡P地区の事例

聞き取り調査を実施したのは、ナコン・シータンマラート県ムアン郡・ナコン・シータンマラート郡ならびにラノン県ムアン郡・ラノン郡内の漁村である（地図2参照）⁶⁾。まず、ナコン・シータンマラート県の事例からみていく。

シャム湾に面するナコン・シータンマラート県は、古くは「リゴール」と呼ばれた南部の中心的都市の一つであり、古代から東南アジア大陸部における仏教の中心地の一つとして栄え、仏教徒が多数派を占める地域でもある。人口は約152万人（2000年センサスに基づく）、うちムスリム人口は約285,000人である（Gilquin 2005:40）⁷⁾。



地図2. タイ南部拡大地図 (Googlemap より引用)

このような「混住」地域では、ムスリムと仏教徒間の通婚も珍しくなく、地区の役所での聞き取りでは、周辺で少なくとも120組が異なる宗教間の結婚であると言う。多くは仏教徒の女性が、ムスリムの男性と結婚するケースであるが、仏教徒の男性が、イスラーム教徒の女性と結婚する場合もある。ただし、必ず仏教徒の方がイスラームに改宗し、ほとんどがムスリムのコミュニティで生活することになる。インタビューしたカニ加工工場のオーナーの女性も、元々は仏教徒集落の出身であり、ムスリム男性と結婚してイスラーム教に改宗した⁸⁾。

聞き取り調査を行ったナコン・シータンマラート県P地区は、県の中心となるムアン・ナコン・シータンマラート郡に位置し、12の集落（ムー・バーン）からなり、人口は約32,000人である。住民の職業は、漁業、農業の他、建設労働などの日雇い労働が多い。ただし、住民の大半は主業・副業の如何を問わず、漁業や船を使った運送業に携わる。住民の多くは仏教徒であるが、人口の約20パーセントはムスリムである。地域内に8つの寺と7つのモスクが存在する。ムスリムは特定の村に集中しておらず、各村に散らばって住んでいる。理由の一つは前述の通り、仏教徒との婚姻である。

マレー半島に位置する南タイ人は、古くから漁業や海洋交易を生業としており、とりわけメー・ヤー・ナーン信仰は根強い。供養しないと暴風雨に見舞われると言い伝えられ、もし、供養しない船で海に出て海難事故に遭った場合、漁民たちは「やはりメー・ヤー・ナーンの供養しなかったからだ」と考えると言う。南部のメー・ヤー・ナーン儀礼は、2月の中国正月（トルック・チーン）になされることが多いため、元々は中国系住民の信仰が、タイ人漁民の間に広まったという説もある。しかし後述するように、同様の形式で執り行われる船霊儀礼は、対岸のミャンマー領の漁民や、両国にまたがる漂海民にも見られるため、船霊信仰はもっと以前からこの地に存在したと考えるほうが自然であろう。あるインフォーマントが述べていたように、船主が華僑系であることが多いため、船主が決めた休日に儀礼を行うようになった、という説のほうが信ぴょう性が高い。

P地区でのインタビューによると、中国正月の他、新しい船を購入した時も、船主もしくは船頭は、メー・ヤー・ナーンへの供養の儀礼を行う。まず、花、ろうそく、線香、食べ物などが備えられる。場合によっては、僧侶が招かれ、パーリ語の呪文を唱え、儀礼は終了する。

ムスリム漁民の船霊儀礼も、かつては仏教徒と同じ儀礼を行っていたが、最近ではイスラーム復興運動の影響もあり、おおっぴらに供養を行うことは少なくなってきた。P地区でカニの加工工場を経営するS氏（43才）およびその妻によると⁹⁾、イスラーム教は、一神教のため、精霊信仰を避ける傾向がある。S氏の妻は元々仏教徒でもあり、メー・ヤー・ナーンを信仰している。ただし、ムスリム集落に住んでおり、供養をするときは、仏教徒と同じような供養は行わず、できるだけ「イスラーム風」に儀礼を行うという。仏教徒のように、中国正月に儀礼を行わず、自分たちの都合により決めた日時でメー・ヤー・ナーンへの供養を行い、儀礼を司る

のはイマーム、儀礼の中心はコーランの暗唱という形式をとる。

P 地区に住む船大工 W 氏への聞き取りによると¹⁰⁾、同地でのメー・ヤー・ナーン儀礼は、僧侶（仏教徒の場合）もしくはイマーム（ムスリムの場合）を招くこともあるが、船主や船頭および関係者だけで行われる場合もある。ただし、船頭が臨席する場合、中部タイでのメー・ヤー・ナーン供養のように特別な役割がある訳ではない。主催者はあくまでも船の所有者である。仏教徒、ムスリム、双方共に船霊を「メー・ヤー・ナーン」と呼び習わし信仰している。メー・ヤー・ナーン儀礼を行う前に、占い師に吉日を占ってもらう。ただし、仏教徒はワン・ブラ（仏日）でも船を出す、イスラーム教徒は金曜日が吉日でも絶対船を出さない。また、仏教徒の場合、船にナム・モン（聖水）をふりかけるが、ムスリムは黄色いもち米を用意し、それを撒く。一般的にムスリムの方が儀礼は簡素である。また、仏教徒であっても、中部に比べると、南部のメー・ヤー・ナーン儀礼は簡素で短い。儀礼終了後、午前9時に出航するのが一般的である。

P 地区のような仏教徒とムスリムの漁民が共住する地域では、船の元の所有者と現所有者の宗教が異なる場合も発生する。例えば、ある船の最初の所有者がムスリムで、最初のメー・ヤー・ナーン儀礼をイスラーム式に行った場合、次の所有者が仏教徒であっても、彼のメー・ヤー・ナーン儀礼はイスラーム式で行わなければならないと言う。他方、前所有者が仏教徒の船をイスラーム教徒が購入した場合、イスラーム風の儀礼を行うのは構わない。また、ムスリムの船はコーン（船首部分）を長くする。仏教徒は長いコーンを好まない、もしムスリムの船を購入した場合、コーンを短く切ってしまう。しかし、切り取ったコーンを家に置いておくのは「不吉」とされるので、切った部分は、寺に持っていく。ムアン・ナコン・シータンマラート郡の北に位置するターサーラー地区は、シャム湾に面した、同じくムスリムの多い地域であるが、仏教徒とイスラーム教徒の共住する漁村ではメー・ヤー・ナーン信仰は現在でも根強く残っている（写真8および9参照）。ムスリムのメー・ヤー・ナーンは、仏教徒と異なり、花輪を飾ることがなく、布の色数が少ないといわれるが、ナコン・シータンマラート県におけるムスリム居住地域の一つであるターサーラー郡漁村で見かけた船はいずれも、多色の色布が巻かれていた。また、主に深南部のムスリム漁民が使用する、装飾と彩色を施した「ゴレ（golek）船」も停められており、そこにもメー・ヤー・ナーン信仰の色布が巻かれていたのが印象的であった。

3-2. ラノー県ムアン郡ガーオ地区の事例

ラノー県はアンダマン海に面する小さな県である。人口は約16万人であり、そのうちムスリム人口は約3万人である（Guiquin 2005:40）¹¹⁾。調査地であるムアン・ラノー郡G地区は、漁業が盛んな地域である。5つの集落（ムー・バーン）からなり、第1、2集落は仏教徒の村、第3、4集落はムスリムの村、第5集落は仏教徒を中心とし、様々な宗教を信仰する人々が住む地域となっている。第5集落は島であり、ミャンマー領海から移住してきた漂海民（モーケ



写真 8. ナコンシータンマラート県ムアン郡ターサーラー地区漁村のメー・ヤー・ナーン
コーン（船首）部分が長いので、ムスリム所有の船と思われる。古い布を捨てることなく、新たに布を巻
いている。巻かれている布の色も多彩である。



写真 9. ナコンシータンマラート県ムアン郡ターサーラー地区漁村。
ゴレ船のメー・ヤー・ナーン

ゴレ船は、南タイ・ムスリム漁民独特の装飾・彩色を施した漁船。通常、ゴレ船を使用するのは、深南部
パタニー県、ヤラー県のムスリム漁民であり、ナコンシータンマラート県で見かけるのは珍しい。所有者（ム
スリム女性）が、パタニーに住む親族から購入したものであると言う。

ン族）が 30 戸ほど住んでいる。彼らはキリスト教を信仰している。

聞き取り調査を行ったのは、G 地区第 4 集落に居住する S 氏（58 才）および、その妻、長
女である¹²⁾。第 4 集落は、270 戸ほどの世帯からなり、住民は全員ムスリムであり、集落内
にはモスクも存在する。住民の約 80 パーセントは漁業で生計を立てており、他に農家や日雇い

労働者世帯も存在する。村で最も豊かな住民は、カニの養殖と高級食材となる海ツバメの巢の養殖を手広く行っている事業家であり、S氏もまた、漁業の他、6ヘクタールほどのゴム農園、サトウ豆の栽培などを行っている富裕な住民の一人である。S氏の母親は仏教徒であり、また北部出身のS氏の妻（53才）も元は仏教徒である。S氏がプーケットで働いている時に知り合い、彼との結婚をきっかけにムスリムに改宗した。S氏の妻も娘もスカーフやベールを着用せず（妻は帽子着用で代用）、外見上は仏教徒の住民と変わらない。男性もモスクに行く時以外は、帽子を被らない。村の女性たちの多くも同様であり、ムスリムと一見して分かるような服装はほとんどみかけない。イスラームの女性たちがスカーフをまとい、容易にイスラーム教徒の女性とわかるナコン・シータンマラート県のP地区とは対照的である。また、G地区では女性が一人で船に乗り、漁に出ることも珍しくないという。

集落には、他にも婚姻時にムスリムに改宗した女性たちが何人かおり、前述の村で一番の富裕住民の妻も元々は仏教徒である。S氏は、かつて自身が仏教徒の中で働いた経験もあり、母親も妻も仏教徒であるため、仏教への理解も深く、ムスリムとしての宗教実践はかなり柔軟であるが、それでも、精霊信仰が生活の一部となっている仏教徒に比べ、精霊信仰への強いこだわりはないと言う。祖先を祀ることはないし、家系よりも宗教の方が大切であると考えている。しかし、S氏も漁民として必要に応じて自分の船の上でメー・ヤー・ナン儀礼を行う。ただし儀礼は非常に簡素なものであることを強調する。イマームを呼んできて船上でコーランを読むという形式をとり、その後、舳先に布を巻き、参加者全員で共食を行う。巻く布は多くても3色であり（写真10および11参照）、線香の代わりにカンマヤーン（松脂）が焚かれる。S氏の考えでは、メー・ヤー・ナン信仰はムスリムの若い漁民の間では、これから衰退していくという。ただ、彼は漁民から精霊信仰がなくなることはないと述べる。ただ、彼にとっては「船霊（メー・ヤー・ナン）」よりも「海神（ピー・タレー）」の方が畏怖の対象であると考え



写真10. ラノーン県ムアン郡G地区におけるムスリムの船のメー・ヤー・ナン（1）
船首部分が長いのが特徴。



写真 11. ラノーン県ムアン郡 G 地区におけるムスリム船のメー・ヤー・ナーン (2) 巻き布の部分。赤、ピンク、白の三色である。

るからだと言う。

G 地区には、S 氏のようなムスリムの他、漂海民、ミャンマーから移住してきたタイ系ムスリム (タイ・パラットティン)、中部から移住してきた仏教徒の漁民が共住している。彼らはみな、メー・ヤー・ナーンを信仰する。しかし、互いに自分たちのやり方を相手に強要することはない。その理由の一つに多神教的発想があることは否めない。S 氏が仏教徒漁民のメー・ヤー・ナーン儀礼を尊重するように、仏教徒漁民は、メー・ヤー・ナーン儀礼に豚肉を使わない。なぜなら「この土地神 (チャオ・ティー) は、イスラームの神だから豚肉を嫌う」からだと言う¹³⁾。

3-3. タイ南部ムスリムの船霊信仰

以上、ナコン・シータンマラート県ならびにラノーン県におけるムスリムの船霊信仰について述べた。「タブリーグ」活動に象徴されるイスラーム復興運動の影響はタイ南部ムスリムの信仰の「純化」を促すものとなっている。そのため、ムスリムの船霊儀礼は、仏教徒と比べると「簡素」であることを含めた細部の相違が強調され、イマームの招聘などイスラーム的解釈が付加されていることが分かる。しかし、ムスリムの船霊信仰は、これら調査地だけではなく、他の地域にも広範囲に広がると考えられる。小河久志はマレーシア国境に近い南部トラン県のムスリム集落の船霊信仰について、以下のように述べている。「船霊とは女性の精霊で、漁の安全や漁獲の多寡をつかさどるとされる。一般に船霊の宿る船首部 (hua rua) を踏んだり、船内で下品な言葉を使うことは、船霊の機嫌を損ねる行為とされ慎まれる。漁民はまた、漁の成功を願い、新船進水式や船補修 (年 1~2 度) の終了日、新漁開始前日、漁具購入時や大漁時、逆に不漁の場合などでも船霊の機嫌をとるため頻繁に儀礼を行う。」(小河 2005 : 5)

小河によると、この集落でのメー・ヤー・ナーン儀礼は、色布の新しいものへの交換、香水

(nam hom) の船全体へのふりかけ（右回り）、松脂の焼きつけ、共食、そしてイスラームの知識を持つ村人によるドゥアー¹⁴⁾の詠唱そして最後に、再度呪文を唱えながら揚げた米 (khao tok) を船首部に投げつけて終了する（小河 2005:5）。また、小河の調査地では、仏教徒コミュニティでよく見かけるサーイシンと呼ばれる綿糸で作られた紐を、子供の手首や腰、首に巻きつける習慣がある。悪霊や病気から守るために手首に糸を巻く。仏教徒の間では、よく見られる魔除けの行為であるが、この集落のムスリムにとっても、紐を巻くという行為は、子供への厄除けとして行われるという（小河 2005:5）。祈りの対象は、先祖霊や土地神、アッラー神とそれぞれであるという。

ムスリム住民の船霊信仰の根強さについて考察する前に、最後に周辺の他民族の船霊信仰についても述べたい。

4. ミャンマー東南部の船霊信仰

船霊信仰を有するのは、タイ人だけではない。本節では、ミャンマー東南部コータウンの住民における船霊信仰について述べたい。

ラノー県は、狭い海峡を経て、ミャンマー領コータウンと向い合っており、近年、ミャンマーとの交易が盛んな地域でもある。ラノーの港には、ミャンマー側と行き来する客を乗せた船や漁船が行き来する。これらの船にも船霊信仰を表す布が巻かれている（写真12参照）。コータウンの漁民社会でも船霊信仰は盛んである。船霊は船首に宿るとされ、布を巻くことで船霊への畏怖を表現する。写真12から分かるように、タイ漁民同様、船首部分に布を巻き船霊への畏怖を表現する。しかし、コータウンの船霊は「ウー・シンジー」というナット神（男神）である。このウー・シンジーは、バガン時代に決められた「37の公式ナット」には含まれない



写真12. ラノーの港に停泊するミャンマーの船
船首部分に紅白の布が巻いてある。

が、非常に有名なナットである（写真13）。ウー・シンジーは、厳密に言うと「船霊」というよりは「海神」であるが、37のナットに続く有名なナットであり、信仰する者は漁民、船乗りだけとは限らない。漁民たちは、出漁、出港前などに海上での安全を祈って船首に米で作った菓子や干したキンマなどを備え、ウー・シンジーの魂を呼び出す儀礼を行う。タイ同様、船首に布を巻くが、一緒にフトモモ草を備える場合もある。漁民、船乗りにおけるウー・シンジー信仰は、東南部に限らず、ヤンゴンを含むミャンマー全土の沿海部漁民・船乗りの間に広く普及している。タイにおけるメー・ヤー・ナーン信仰と同様である。布を巻けるような舳先のない形の船の場合は、船首部分に花を飾り、出港前に必ずウー・シンジーへの供犠を行う。

ミャンマーでは、内陸部にも同様の「船霊」信仰が存在する。バガンのエイヤーワディー川沿いの漁民は、ガンジーシンという一組の男女の精霊を船霊として信仰している（写真14）¹⁵⁾。二人は兄と妹であり、地域住民は、船（最近では自動車も）を購入した際は、ガンジーシンの祠に報告し、供物を供える。ガンジーシン信仰もやはり船首部分への船飾りによって示されるが、飾りは上下二重になっており、上の部分は仏教信仰、紅白二色の布を巻いた下の部分は、ガンジーシンへの信仰を表すと言う。古くなった巻き布は川に捨てるか、ガンジーシンの祠の周囲の木に巻いておく。

このようなミャンマーにおける2つの「船霊」の併存であるが、ミャンマー人は「イエーガンバイン・ウー・シンジー（ウー・シンジーは海水を治める）」という言葉で説明する。つまり、海上での船霊は「ウー・シンジー」であり、河川上での船霊は「ガンジーシン」になると言う。

このように、船霊の性別や呼称にタイとの違いがあるとは言え、ミャンマーにおける「船霊」

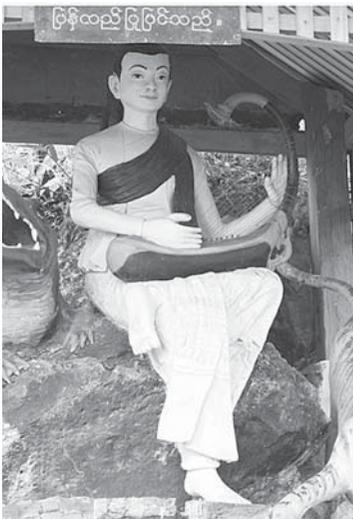


写真13. ウー・シンジー神像
竖琴を抱いたポーズで海を向いている。



写真14. バガン郊外エイヤーワディー川
（イラワジ川）沿いのガンジーシンの祠

この祠には一柱のご神体のみ。頭上、右手、祠の扉の取っ手の左右に船から交換のために取り外された紅白の布が巻きつけられている。

への信仰、そしてシンボルとしての布巻行為や忌避行動の類似性は、この「船霊」信仰が、仏教やイスラーム教より古い、東南アジア島嶼部の多神教的世界と結びつく信仰として広く存在していたことをうかがわせると同時に、この信仰を、小さなコミュニティもしくは南部仏教徒／ムスリムのそれぞれの「土着信仰」とその変容、という視点を越えた、文化圏としての船霊研究の必要性を提起しているように思える。

結論

以上述べてきたように、メー・ヤー・ナーン信仰、もしくはウー・シンジー信仰とは、タイ、ミャンマー両国における海・河川沿いの漁民、船を扱う職業の人々の間に広範囲に存在する船霊信仰である。そして本稿では、この信仰が、タイ南部の仏教徒やムスリムだけではなく、隣接するミャンマーの漁民の間でも深く信仰されていることを明らかにした。

メー・ヤー・ナーン信仰は、儀礼時の僧侶の読経に見られるように、一見、仏教との関わりが深いように見えるが、まさに東南アジア的「神仏習合」の世界であり、ムスリムをも巻き込む「シンクレティズム」でもある。タイのムスリム社会研究においては、ムスリムが多く居住するパッタニー、ヤラー、ナラティワートの深南部3県が取り上げられることが多いが、元来マレー半島では、イスラーム化以前に、土着信仰と結びついたヒンドゥー、仏教的宗教文化の土壌がすでに醸成されていた。15世紀以降、この文化的土壌の上に徐々にイスラーム化が進んでいったため、信仰の形態もスーフィー的な色彩の強い発展を遂げていった。元々マレー半島の仏教徒とムスリムの間には、共有される文化的土壌が存在する。

昨今のイスラーム復興運動の潮流の下で、このような土着儀礼に対して、批判的な見方も存在することは確かである。前述のナコン・シータンマラート県P地区でのムスリム住民へのインタビューでは、ムスリム漁民はメー・ヤー・ナーン儀礼が次第にやりづらくなっているという話も聞かれた。ただし、今は儀礼を行わなくなったムスリムの村人も、「心の中では、ムスリムもいまだメー・ヤー・ナーンを信じているし恐れてもいる」。

儀礼の一部をイスラーム化しつつも、根強く信仰を保持しているケースも存在する。小河の調査地では、強硬派の人々が、土着の信仰に基づく儀礼を容認しない立場であるにもかかわらず、メー・ヤー・ナーン儀礼の執行役を担ったり、護紐（サーイシン）用糸の作成を行ったりしているが、これらの行為に対して、あからさまな批判は存在しないという。むしろ、長年にわたり行われてきた土着の儀礼が存続していることへの村人側の安堵という心理的要素があると指摘する（小河2005：7）。

また、小河は以下のような興味深い視点を提起している。「まして反対者である強硬派の村人が儀礼に参加すれば、儀礼は「非イスラーム的」なものと思なされることもなくなる。第2

に護紐の例からも明らかなように、高度なイスラーム知識を呪術的力と同義のものとなす価値観がM村社会に存在する点も見逃せない。これは一般の村人が、イスラームと土着の信仰との差異をさほど重要視していないことを示している。」(小河 2005:7)。そこで選ばれた解決方法は、「ドゥアーを詠唱しさえすればイスラームの教理に反しない」つまり「儀礼のイスラーム化」という解釈である(同上)。タイ南部ムスリムの「海=異界」への畏怖が反映された世界観がそこにかがわれよう。そして、このような世界観が住民に強固に根付いている限りは、強硬派のメンバーも、あからさまに批判することは出来ない。なぜなら、批判した時点で、「彼ら自身の集落における威信が低下する危険性があるから」である(小河 2005:7)。

小河は「一般の村人が、イスラームと土着の信仰との差異をさほど重視していない」と指摘しているが、これはムスリム漁民だけに生じる解釈ではない。前述したラノーン県のムスリム集落に住む仏教徒の「土地神がイスラームの神なので、豚肉は供物に選ばない」というイスラーム解釈は、まさに多神教的な他宗教解釈であろう。象徴的な出来事が、ラノーン県G地区において、筆者が立ち会った村人の婚姻儀礼「ニカ」である。「ニカ」は結婚するカップル、イマム、モスク委員会の委員、双方の父親等が立ち会う結婚承認のための儀礼である。新郎は20歳を超えたばかり、新婦は17歳という若いカップルであったが、中学校を出てからずっと働いている新郎は、イスラーム学校にほとんど通った経験がないため、アラビア語は読めず、コーランの復唱もつまりがちであった。また、儀礼の最中に、新婦の親族が「ナムモン(聖水)」の入った銀製のカンナム容器一式を持って現れた。これは通常、仏教徒の結婚式に用意され、僧侶が新婚のカップルの祝福のために水をかける行為に使われる。容器は、臨席していたムスリムの長老たちによって下げるように命ぜられたが、これは結婚式には、「臨席する宗教家や長老による清めの儀礼が必要」という村人の素朴な理解に基づくものである。調査地のように仏教徒との混住地域では、ムスリムではあっても、日常目にする仏教式結婚式の影響力は大きく、イスラーム式の婚姻との間で、混乱が生じたものと思われる。住民の多くは、ムスリムとして生まれるが、きちんとした宗教教育を受ける機会は少ない。ましてや、中学や高校を出てすぐ働き始めた若者たちは、ムスリムのコミュニティを離れ、仏教徒と交じり合っただ半を過ごす。つまり、ムスリムが多数派を占めるコミュニティにあっても、他宗教コミュニティとの混住地域では、仏教的要素は容易に入り込んでくるのである。

また、一方で、本来、非仏教的であるメー・ヤー・ナン儀礼において、僧侶が呼ばれる行為は同様に「儀礼の仏教化」とみなすことが出来よう。つまり、一つの精霊信仰が、仏教とイスラーム教という相異なる宗教に同時に習合していると言える。

津村は、近代国家形成期のタイで仏教の「近代化」が図られ、仏教の卓越に伴う呪術的信仰の相対的な弱体化のみならず国家の側から積極的に呪術的信仰を制限する動きがあったと述べている(津村 2002:37)。また、1930年代以降、タイ東北部で輩出された専門的祈祷師「モー

タム（mo tham）」は、従来の「モー・ピー」と呼ばれる呪術師と明確に概念的区別がなされ、前者は仏法（タム）の力に依存するのに対し、後者は力の源泉を精霊の呪力に依存するとし、仏法を背後に主張することで呪的サービスを提供した（津村 2002:37）。つまり、近代国家形成期にタイは、仏教の教義としての「純化」を目指し、そのプロセスの中で、呪術を含む精霊信仰を周縁化させていったのである。

同様のプロセスがタイ南部でも進行したことは想像に難くない。しかし、「海」という「異界」は余りにも特殊である。仏教の優越により森や村祠が消え去ったとしても、「海」に対して漁民は、祖霊・守護霊や法力から切り離され、個別に立ち向かわなければならない。「海」は「異界中の異界」として君臨してきた。ムスリム漁民にとっての「海」イメージも同様であったであろう。宗教の如何を問わず、船霊信仰が現在に至るまで持続している最大の理由はその点にあると筆者は考える。

タイの船霊信仰「メー・ヤー・ナン」が当初から、そのように呼ばれていたのか、については議論の余地があろう。しかし、タイという国家が、いかなる形においても、「精霊（ピー）」信仰のパトロンになったり、タイ族化を目指して公式なピーを指定する、という政策を行うことはなかった。津村や林が指摘するように、タイ（仏教）にとって、精霊信仰は制限されるべき対象であったからである。しかし船霊信仰は、やや特殊な扱いを受けていたきらいがある。なぜなら、大きな商船や軍隊においても「メー・ヤー・ナン」と呼ばれる船霊信仰が続けられてきたからである。ゆえに「メー・ヤー・ナン」は地域・宗教を超えた船霊呼称として、タイに君臨してきたと考えられる。

他方、ミャンマー東南部における船霊の呼称は、「ウー・シンジー」という名称が示す通り、後述する 37 の「公式ナット（精霊）」ではないが、公式ナットに匹敵するほど有名なビルマ族のナットである。ミャンマーのナットは、それぞれ典型的なイメージとして実体化している点がタイのピーと対照的であり、ウー・シンジーは、ビルマ族の伝統的衣装に身を包み、堅琴を抱えた美しい青年として描かれる。海難事故から船を救うために、自ら海に身を投じたという伝説から、船霊信仰の「祭神」として後に祀り上げられたのだと考えられるが、他民族国家ミャンマーにおいて船霊を信仰する民が全て「ウー・シンジー」と呼ぶわけではないようである。前述のコータウンはムスリム人口の多い都市（約 60%）でもあり、ムスリム漁民もやはり船霊を信じているが、彼らは船霊を「ウー・シンジー」とは呼ばない。他方、有名なナット神であることから、船霊信仰とは無関係にウー・シンジーを信仰する人々も存在する。

「ナット」と呼ばれるミャンマーの精霊に対する信仰は、タイの「ピー」信仰とは異なる道を歩んできた。その理由は、言わばナットの「国教化」にあると言える。ミャンマーにおける「ナット」は、タイよりもより公式的な形で仏教と結びついている。ミャンマーのナットは大きく分けて、37 の「大ナット（公式ナット）」と、木の精、水の精といったその他のナット

に分けられ、ナットへの儀礼の様式化も進んでいる。そもそもこの大ナットは、バガン王朝のアノーヤター王が、仏教を浸透させるために、庶民の間に存在する無数のナットとそれに対する信仰を整理／管理するため、公式ナットとして37のナットを「指定」したことに端を発する。乱暴な言い方をすれば、ミャンマーにおける精霊信仰の「国家ライセンス」化である。公式ナットの中には、アノーヤター王時代の王家出身の人物も含まれている。つまり、この37の公式ナットは、仏教の浸透政策の下、征服された周辺の異民族へのビルマ族の「ナット」の押し付けの側面があり、また彼らに対するビルマ族の優位性を示す象徴にもなってきたとも考えられる。タイ同様に、「ナット」も仏教の優越性の下で習合し変容してきたが、このような「ナット」の「差別化」が図られたことが、タイとミャンマーの精霊信仰における大きな違いであろう。

タイ南部の仏教徒とムスリムの漁民が、共有される基層文化と宗教的相違を上手くコントロールしつつ「メー・ヤー・ナーン」信仰を持続させる一方で、船霊信仰を共有しながらも宗教的分離が民族分離につながっている感のあるミャンマー社会を見ていると、この精霊信仰の社会的意味合いの違いが、両国の宗教的対立の一因に存在しているのではないかという思いにとらわれる。異なる宗教を信仰する集団同士をつなぎとめる要因として、もはや基層文化は機能していない。

津村は、タイの精霊信仰を分析した論考の中で、ピーーについての従来の研究が、「村落の守護霊に関わる共同体レベルでの精霊信仰を対象化したものがほとんどであり、また精霊信仰を読み解く視点も機能主義的側面ばかりが強調される」と批判した上で、この研究視角を乗り越える必要があることを指摘している（津村2009：1）。そして、ピーーに関する言説の分析を行うことで、「不可知性」と「ハイパー経験主義」という2つの特性を見出す（津村2009：23）。筆者はこの指摘に同意である。筆者がここで述べたいのは、村落レベルの精霊信仰でもなく、個人レベルの精霊信仰でもない、国家や宗教を超えて継承される「信仰」圏の存在である。タイ・ミャンマーの精霊信仰研究に欠如しているのは、この国家や宗教を超えた視点からのアプローチであると言えるのではないだろうか。

注

- 1) 本論文は、橋本卓・橋本泰子「タイ南部・ミャンマー東南部における船霊信仰－「メー・ヤー・ナーン」と「ウー・シンジー」」、2012、『アジアにおける精霊信仰の近代的変容－ジェンダー・地域・エスニシティに及ぼす影響－』（平成21年度～23年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書：研究代表者・橋本（関）泰子）、49-66.に大幅に加筆修正を加えたものである。なお、本稿中で紹介する調査データは全て、科学研究費補助金（基盤研究B）「アジアにおける精霊信仰の近代的変容－ジェンダー・地域・エスニシティに及ぼす影響」（研究代表者・橋本（関）泰子）により2009年8月－9月、2010年3月、および8－9月、2011年3月ならびに8月－9月、2012年2月に、タイならびにミャンマーにて実施されたフィールド調査に基づく。また、2012年8月には、個人研究費によりタイ南部にて補

足調査を行った。

- 2) 2011年8月26日、ナコン・シータンマラート県ムアン郡にてインタビュー。T氏は、同県ムアン郡タムボンP自治体長で、以前はエビの養殖業に携わっていた。
- 3) 1949年以来、タイのイスラム教は、仏教同様、チュラーラーチャモントリー（タイのイスラーム教界の最高指導者）を頂点に、全てのムスリムを末端に置いた中央集権的なイスラーム行政組織に組み込まれており、いわばムスリムはタイ国家によって管理されている。行政組織は、上から、チュラーラーチャモントリー、タイ国イスラーム中央委員会、県イスラーム委員会、モスク委員会の順に構成されており、そこにおいてムスリムはモスクへの登録を義務付けられている（小河 2005：3 ならびに橋本 1987：241）。
- 4) 木村によると、バンコク周辺に多いのはタイ南部からの居住者、北部に多いのは雲南系ムスリム（回族もしくはホー族と記述される）であるのに対し、全国に偏在しているのはパキスタン系ムスリムである（木村・松本 2005：84）。
- 5) 木村によると、ナコン・シータンマラート県ムアン郡のターサーラー村周辺のムスリムは、現マレーシア、ケダー州から連れてこられたムスリムの最初の居住地であり、その後、同県内の他の郡へと移住していった（木村・松本 2005：90）。
- 6) 調査は、2010年8月23～28日、2011年3月ならびに8月21日～9月3日にかけて実施された。調査の中心は、本文に述べるナコン・シータンマラート県ならびにラノー県であるが、比較のためにムスリム・漂海民の住むクラビー県ランター島でも聞き取り調査を行なっている。また、船霊信仰と深い関係のある「木の精」信仰については、中部サムットサーコーン県、ラーブリー県にて補足的聞き取り調査を行った。
- 7) タイ国イスラーム中央委員会の統計によって計算された Gilquin のデータに基づくと、ナコン・シータンマラート県の総人口に占めるムスリム人口の割合は、約 19% となる。しかし、2000 年の同県のセンサスでは、ムスリム人口は全人口の 6% となっており、かなりの相違が見られる。木村の指摘通り、イスラーム中央委員会の数値は、モスクへの登録人口がもとになっているため、タイ国籍を有しない者も数に含まれている。そのため若干多めに見積もられている可能性はある。
- 8) タイ南部の仏教徒、ムスリムの共住地域での、異なる宗教間の通婚は、非ムスリムの側がムスリムに改宗するという一方的な改宗の流れによって説明されることが多いが、実際は、もっとフレキシブルである可能性もある。調査時には、ムスリムでありながら、親の死に際し出家をしたいため、仏教に改宗したいと希望している若者の話や、結婚によってイスラームに改宗した女性が、再婚によって再度イスラームからキリスト教に改宗したケースも聞いている。また、木村によると、タイではムスリムと仏教徒の結婚に伴う改宗が日常的に行なわれており、このこともムスリムの人口統計を不明確にする要因の一つであると言う。ノンジョーク区、ミンプリー区などバンコク周辺のマレー系ムスリムの集中する地域では、都市部の拡大とともに仏教徒との混在が進んだほか、工業化により企業での就業機会が増えたため、これらの地域に住むムスリムは仏教徒と接触する機会が増えている。こうした状況の下で、バンコク市ノンジョーク区では、仏教徒との婚姻は約 90% にのぼり、ムスリムの女性と仏教徒の男性の婚姻が多い。多くの場合、仏教徒がムスリムに改宗している。（木村・松本 2005：107-108）。
- 9) 2010年8月25日、ナコン・シータンマラート県ムアン郡 P 地区にてインタビュー。
- 10) 2011年8月26日、ナコン・シータンマラート県ムアン郡にてインタビュー。W氏は、同地にて小規模な造船所を営む人物。

- 11) 同様に, Gilquin のデータに基づくと, ラノーン県の総人口に占めるムスリム人口の割合は, 約 19% となる。しかし, 2000 年の同県のセンサスでは, ムスリム人口は全人口の 10% となっており, かなりの相違が見られる。
- 12) S 氏とその家族への聞き取り調査は, 2009 年 9 月, 2010 年 9 月, 2011 年 3 月ならびに 8 月にかけて, 断続的ではあるが, 複数回実施している。年齢は 2013 年現在である。
- 13) 2011 年 3 月 4 日, ラノーン県ムアン郡 G 地区にてインタビュー。
- 14) ドゥアー (dua) とは, 神アッラーに対する祈願の言葉。であり, クルアーンやハディースに由来する決まり文句であるが, 小河によると, この儀礼において祈りの対象は, アッラーではなく, メー・ヤー・ナーンであり, そのため, ドゥアーではなく, イスラムとは無関係の呪文 (khata) を唱えるケースもあると言う (小河 2005: 5)。
- 15) 2012 年 2 月 22 日, バガン・エイヤーワーディー (イラワジ) 川流域での聞き取りによる。バガンでは, ガンジーシンという一対の男女の精霊が信仰されている。二人は兄と妹であり, 船を守護する一種の「船霊」である。

参考文献

<日本語文献>

- 橋本卓・橋本泰子「タイ南部・ミャンマー東南部における船霊信仰－「メー・ヤー・ナーン」と「ウー・シンジー」」, 2012, 『アジアにおける精霊信仰の近代の変容－ジェンダー・地域・エスニシティに及ぼす影響－』(平成 21 年度～23 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書: 研究代表者・橋本 (関) 泰子), 49-66.
- 橋本卓, 1987, 「タイ南部国境問題とマレー・ムスリム統合政策」『東南アジア研究』25 (2), 233-253.
- 林行夫, 1993, 「モータムと「呪術的仏教」－東北タイ・ドンデーン村におけるクン・プラタム信仰を中心に－」[安中章夫編『東南アジア－政治・社会 (地域研究シリーズ 第 6 巻)』] 所収, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 256-292.
- 林行夫, 1989, 「ダルマの力と帰依者たち」『国立民俗学博物館研究報告』14 (1), 1-116.
- 川崎晃稔, 1984, 「船霊と刳舟」日本民俗研究大系編集委員会編『日本民俗研究大系』5, 國學院大學, 335-355.
- 木村正人・松本光太郎, 2005, 「イスラーム地域としての中国とタイ (2)」『コミュニケーション科学』(22), 81-112.
- 楠本正, 1993, 『玄界の漁撈民俗－労働・くらし・海の神々－』海鳥社.
- 野口武徳, 1972, 「南島の船霊信仰」古野清人教授古希記念会編『現代諸民族の宗教と文化－社会人類学的研究－』社会思想社, 249-267.
- 野地恒有, 2008, 『漁民の世界－「海洋性」で見る日本』講談社.
- 小河久志, 2005, 「現代タイ国におけるイスラーム実践の変動に関する人類学的研究－イスラーム復興運動「Tabligh」と国家宗教制度, 精霊信仰の相互関係から－」(庭野平和財団 平成 17 年度研究助成報告書), 1-8.
- 津村文彦, 2009, 「タイの精霊信仰におけるリアリティの源泉－ピーの語りにもみる不可知性とハイパー経験主義－」『福井県立大学論集』33, 1-24.
- 津村文彦, 2002, 「ナーン・ナークの語るもの－タイ近代国家形成期の仏教と精霊信仰－」『アジア経済』XLIII-1, 25-43.

<英語文献>

D. G. E. Hall, *A History of South-east Asia*. London: Macmillan, 1955.

Michel Gilquin (translated by Michael Smithies), *The Muslims in Thailand*, Silkworm Books, 2005.

Tambiah, S.J. 1970, *Buddhism and the Spirit Cults in North-east Thailand*, London:Cambridge University Press.

<タイ語文献>

Thapani Riabrieng, 2006 (1994), *Phithikam lae khwam chua thongthin*, Bangkok.

（関 泰子，四国学院大学社会学部教授）

The Spirit Cult of the Ship Guardian Deity in Southern Thailand

In this paper, the author describes the spirit (ship guardian deity) cult of both Buddhists and Muslims in southern Thailand and southeastern Myanmar, and discusses this by comparing the social implications of change and the persistence of animism in southern Thailand, together with Myanmar. In addition to this, by introducing the case of southeast Myanmar, I hope to raise attention concerning the need for research from the perspective of a "cultural zone" rather than the conventional research that has been limited to the one region or one country. As for the study on the spirit cult in Thailand, in many cases, it tends to be described in relation to the penetration process of Buddhism during the modernizing era. In particular, there has been a strong tendency to choose as case studies Laotian communities in the northeast region of Thailand, since they have their own unique animistic culture and often went against the central power. However, this "unique" animism has also been deep-rooted in the Mon people, well-known as dedicated Buddhists, as well as other Thai groups around central Thailand. Though their practices of the spirit cult were in different formats from that in the Northeast, the influence of animism still exists if the dimensions of their daily life are examined.

The reasons why the author selected the cult of the ship guardian deity in southern Thailand are as follows: to describe (1) how the fishermen are in awe of "the sea," which has seldom been picked as a case of the study of "another world," and how they strive to soothe the spirits, and also to describe (2) how Buddhists and Muslims belonging to different "great traditions" share the naïve spirit cult in a society where they live together. Following current trends, Muslim or Buddhist societies in southern Thailand tend to be researched and analyzed separately. However, in the pre-modern era, and even the modern era, they have been living together as a community, adjacent to each other, with even inter-marriage often occurring among them, so their co-living has been a natural situation. In this paper, therefore, the author choose Nakhon Si Thammarat province and Ranong province as cases where Buddhists and Muslims are co-living, as the research site for the study of the cult of the ship guardian deity among fishermen.

(SEKI, Hiroko, Professor, Faculty of Social Sciences, Shikoku-Gakuin University)